寮にて（粟田国民学校の疎開）　昭和20年（1945）
京都市立京北第一小学校提供

京都市の学童集団疎開

昭和十六年（一九四一）よりはじまった太平洋戦争は日増しに激化し、敵機による日本本土への空襲を目前にして、次の国の担い手（戦力）である学童の縁故疎開（都市の児童を田舎の親戚などの家に移す）をうながしたが、昭和十九年六月三十日、国民学校初等科児童の集団疎開が閣議決定された。最初は指定地域に入っていなかった京都市は、昭和二十年一月十六日夜中に修道学区の馬町が空襲をうけ、三月九日の京都府校長会において「学童疎開促進要綱」が決定され、学区ごとに緊急性の高い順に甲・乙・丙にランク付け、どれだけの割合の児童を集団疎開に参加させるかの目安にした。各学校では疎開についての保護者会が催され、「学童疎開調査票」が各家庭に配られて、縁故疎開、集団疎開、残留（甲にランク付けされた地域では残留の理由を問

寮の前の川での洗面（春日国民学校の疎開）　昭和20年（1945）

われたようだ）のどれかを選んで提出するというように、急ピッチで準備がすすめられた。

昭和二十年三月下旬、春休みに入った時点から、新三年生以上の第一次集団疎開がはじまった。疎開先は地域ごとに京都府下の町村が指定され、宿舎には寺院や教会、旅館などが寮として提供された。疎開児童は、疎開先の国民学校（小学校）で地元の児童と一緒に授業をうけ、放課後は畑を耕すなどの労働についた。約七ヶ月間の疎開生活は、空腹感とホームシックとシラミ等の害虫になやまされ、逃げだす児童もいた。また、引率教員にとっても、子どもの命をあずかった苦しい七ヶ月間だった。一方、疎開児童を受け入れた地域の住民との交流は、想い出深い記憶として残り、年月をへた現在まで交流が続いている例もある。

ISBN978-4-473-03793-0
C0021 ¥1400E

定価：本体 1,400円 +税